

アート振興ワーキンググループ経過報告（1／2）

【議論の背景：第3期アート振興ワーキンググループ提言（4）】

アート振興上の様々な課題を解決していく上で必要不可欠であり、新たな役割が要請され、期待されている**国内美術館の在り方**について、その歴史的経緯も踏まえて検討を行い、これからの在るべき姿を体現する**モデルづくりとその実現に向けた具体的な取り組みに着手**する。

注）この提言における「美術館」とは、原則として、20世紀以降の、作家が明確な作品を扱う、いわゆる近現代美術館を指す。

【今期の課題】

上記第3期提言を踏まえ、**これからの日本におけるアートの振興を推進する上で必要不可欠な機関の具体的な姿**（組織体制、予算構造、経営方針等）を**明らかにすること**に取り組む。

【審議経過／予定】

- 第1回 7月10日 前期までのワーキンググループの状況共有・今期目標提案・意見交換
- 第2回 9月20日 国内美術館と国外主要9美術館の比較・意見交換
- 第3回 11月 6日 ヒアリング：ドリアン・チョン氏〔M+アーティステック・ディレクター、チーフ・キュレーター〕【非公開】
- 第4回 12月24日 理想的な機関の像に係る各委員からの提案・意見交換【非公開】
- 第5回 2月19日 提言のとりまとめに係る方向性の提案・意見交換
- 第6回 3月 5日 提言とりまとめ

アート振興ワーキンググループ経過報告（２／２）

【とりまとめの方向性（案）】

3つの多角化

①美術館/ミュージアムの枠組みを再考・多角化

従来の美術を中心にした芸術ジャンルに加え、我が国からグローバルに価値を発信できるマンガ・アニメーションなどのビジュアルカルチャー全般、さらに建築・デザイン(プロダクト、グラフィック、ファッションなど)・工芸(伝統工芸、民藝など)も含め、日本の文化芸術を俯瞰的な視点から再考し、必要な多角化をめざす。

②組織の多角化

博物館法の改定、ICOMにおける新しいミュージアムの定義（2022）などを受け、従来の芸術的価値の向上に加えて、アクセシビリティ、サステナビリティ、コミュニティなどを意識した社会的機能も充実させる必要がある。そのためには多様な専門性を持った組織として生まれ変わる必要がある。

③収入構造の多角化

公的資金(運営費交付金など)への依存率が高い現状の収入構造モデルでは、①②のような多角化が困難であり、発展の可能性が低い。入場料収入の増収、民間資金(企業、個人、海外からの協賛・寄付・遺贈など)を増やし、よりサステナブルな運営を目指す。